

## 事務局ニュース

### 2000年度大学史研究セミナーの日程について

2000年度大学史研究セミナーの日程がほぼ確定いたしました。会場は、二見剛史会員に実行委員長をお願いいたしまして、九州・鹿児島の志學館大学を予定しております。日程は11月24日（金）、25日（土）、26日（日）の二泊三日となります。課題研究については「地域と大学」が候補に挙がっています。このテーマで報告を希望される会員がおられましたら、事務局の坂本までご連絡ください。あわせて、自由研究の報告者を募集いたします。希望者は、同じく坂本までご連絡くださるようお願いいたします。

**編集後記** 『通信』第20号をお送りいたします。記念すべき20回目の発行となりました。これまで"New Series"と、旧『通信』と区別しておりましたが、これを機会に単純に号数のみを記載することといたしました。それ以外にもいくつかの点で、「通信」第20号はこれまでと違う誌面構成になっています。まず、会員の住所変更や異動などの情報を一括するために、「会員ニュース」という項目を立てました。ここには、就職以外にも昇任・異動人事にかんする情報を集積して、会員諸氏の便宜を図りたいと考えています。また、この項目に会員が執筆した新刊著書の情報も掲載できれば、会員間の学術交流の一助となるのではないかと考え、ただいま準備中です。（進藤記）

『通信』編集は事務局・進藤修一が担当しております。

連絡先〒562-8558 大阪外国语大学外国语学部 進藤修一研究室内

TEL/FAX 0727-30-5355

EMAIL sshindo@pop13.odn.ne.jp

『大学史研究通信』第21号は、7月31日発行予定です。

#### 大学史研究会事務局

〒192-0003 八王子市丹木町1-236 創価大学教育学部 坂本辰朗研究室内 大学史研究会  
TEL 0426-91-4602 FAX 0426-91-9309 EMAIL sakamoto@s.soka.ac.jp

#### 大学史研究会事務局員（五十音順）

阿曾沼 明裕（名古屋大学）  
大川 一毅（早稲田大学）  
児玉 善仁（帝京大学）  
進藤 修一（大阪外国语大学）  
橋本 鈴市（大学評価・学位授与機構）

飯野 靖夫（日本鯨類研究所）  
木戸 裕（国立国会図書館）  
坂本 辰朗（創価大学）  
塚原 修一（国立教育研究所）

## 大学史研究通信

第20号、2000年5月31日（水）

**第20号の内容：**新入会員・会員ニュース・新入会員自己紹介・大学史編纂ニュース・近刊紹介・例会記録・お知らせ・投稿記事・事務局ニュース・編集後記・大学史研究会事務局員一覧

**新入会員**（氏名五十音順、敬称略）以下の方々が新たに入会されました。  
柴田 隆行（東洋大学）

研究テーマ：哲学史の成立史の研究（ヨーロッパならびに日本）・ローレンツ・シュタインを中心とした共同体論・一八世紀～一九世紀のキール大学史

野坂 尊子（桜美林大学大学院）

女子高等教育

研究テーマ：戦後高等教育改革における女性の学問・教育の変革  
一家政教育の再編成に関する実証的研究

福留 東士（広島大学大学院・現在留学中）

研究テーマ：大学教育に関する研究・アメリカの専門職教育・ビジネス・スクールの研究

**会員ニュース**（氏名五十音順、敬称略）

阿曾沼 明裕 会員（所属・住所変更）

新所属先

464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院教育発達科学研究所  
新住所

# 日本大学史研究会

荒井 克弘 会員（所属・住所変更）

新所属先

980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学大学院教育学研究科

TEL/FAX 022-217-6122 E-mail aria@sed.tohoku.ac.jp

新住所

[REDACTED]

神木 哲男 会員（所属変更）

新所属先

630-8258 奈良市船橋町 10 番地 奈良県立商科大学（学長）

阪田 蓉子 会員（所属・住所変更）

新所属先

101-8301 千代田区神田駿河台 1-1 明治大学

新住所

[REDACTED]

館 昭 会員（所属機関の名称変更）

新名称

大学評価・学位授与機構

福石 賢一 会員（所属・住所変更）

新所属先

807-8586 北九州市八幡西区自由ヶ丘 1-1 九州女子短期大学 英文科

Tel.093-693-3335（直通）

新住所

[REDACTED]

## 投稿記事

### 大学史研究会の今後の組織形態について

進藤 修一（大阪外国语大学）

大学史研究会事務局に加えさせていただいてから早くも二年近くがたちました。しかし、ここでは事務局員としての活動から感じたことではなく、あくまでも一会员として、今後の大学史研究会の組織形態について、少しばかり考えを述べさせていただこうと思います。

大学史研究会入会以来私がずっと抱いてきた疑問は、大学史研究会がなぜ学会ではなく「研究会」として運営されているかという点です。恐らくこれまでの研究会の歴史のなかでさまざまな経緯があったのだろうとは想像していますが、そろそろ路線転換をしてもよい時期にさしかかっているのではないかでしょうか。

国立大学の（おそらく多くの公立大学でも）独法化計画がすすみ、また少子化による進学者も減少するなど、大学が非常に厳しい時代に直面していることは誰も否定できないと思います。当然大学教員にもこれまでとは違った「せちがらい」状況が訪れようとしています。活動の場が正式な学会か否かという、これまであまり気にされることもなかった（そして最近までは私自身も活動の実質さえあればそれでよいと考えていた）ことが、次第に重視されるようになってきています。それでも、教員としてすでに大学に所属している人間にとっては、学会への改組のもつ意味が、必ずしも大きなものとは感じにくいかもしれません。しかし、正式に学会組織となれば、とくに就職を控えている若手会員のモティベーションはかなり高まるように思えます。私が現在の勤務先に応募したときも、書類の中に「所属学会」という項目があり、大学史研究会を記載すべきかどうかずいぶん悩みました。なぜなら、会の活動はお粗末な学会よりもはるかにすばらしいものだと私自身が感じていたせいであり、そして、少しでも有利な条件を記載したいというのは、就職活動をしている人間の切実な問題であるからです。

また、若手研究者や大学院生を大学史研究会に勧誘するときも、いちいち本会がいわゆる「研究会」以上のものであることを説明しなければなりません。あるいは、他分野の同僚と雑談するときにも「大学史研究会で活動しているのですが、、、」と言ったところであまり評価されているようには思えません。そこで「研究会とは銘打っていますが、実際には、、、」と説明する破目になります。

このように、研究会を学会組織に改組したほうが利するところ大にして、不利益はないにひとつ生じないと思えます。私は会の中では若輩者ではありますが、今回思い切って提案をしてみようと考えました。会員諸氏にもこの問題をご検討いただきたく、よろしくお願い申し上げます。

4. 原稿の締切などは、そのつど「大学史研究通信」に掲載します。常例では、執筆希望の申込が毎年4月中頃まで、原稿の締切が5月末頃となっています。  
(今回は上記の通りです)

5. 原稿送付、お問合せは、第16号については、事務局の坂本まで(連絡先は最終ページ参照)お願ひいたします。

### 訂正

通信第18号に掲載されました荒木康彦会員の「新入会員自己紹介」2ページ10行目において誤植がありました。謹んでお詫び申し上げます。

(誤) どいつ貿易相→(正) ドイツ貿易商

### 原稿募集

『大学史研究通信』第21号は2000年7月31日に発行予定です。会員諸氏の現在の研究紹介、文献案内、会員主催の行事のお知らせなど、どのようなものでも結構です。皆様からの投稿を心よりお待ちしております。原稿・お問い合わせ等は通信担当者の進藤までお願ひいたします。連絡先は最終ページをご覧ください。

### 住所・所属変更届のお願い

住所や所属(昇任も含む)に変更のある会員は「通信」担当者進藤までご一報くださるようお願いいたします。ご連絡は最終ページにございます、進藤研究室宛にお願いいたします。

### 『大学史研究通信』バックナンバー希望者に頒布いたします

『大学史研究通信』第14号～現在発行号まで希望者に頒布いたします。80円×部数+郵送料(1部の場合90円、2部以上は120円)分の切手を同封の上、編集担当進藤宛までご請求下さい。ご連絡は最終ページをご覧ください。

### 新入会員自己紹介

柴田 隆行 会員(東洋大学)

東洋大学社会学部社会文化システム学科に所属。この3月まで教養課程ドイツ語分野に属していましたが、教養課程解体でこの学科へ分属となり、ドイツ語と社会文化思想史を教えています。専攻は哲学史と社会思想史で、現在取り組んでいるテーマは4つ。1つは共同体論で、おもにヘーゲルとフォイエルバッハの研究。2つ目はその延長として、国家学者ローレンツ・シュタインのキール時代の学説研究。3つ目はさらにその延長として、18～19世紀のシュレスヴィヒ・ホルシュタイン研究。2つ目と3つ目の総合として、キール大学法学部の研究もしています。4つ目はこれらと異なり、哲学史の成立過程の研究で、ヨーロッパと日本双方を調べています。

研究成果のうち大学史研究に関するものとして、『哲学史成立の現場』(弘文堂、1997)、共著『シリーズ・近代日本の知』第1巻(晃洋書房、近刊)、ジーク『大学と哲学—マールブルク大学の哲学史』(共訳、理想社、1997)、「マールブルク大学の哲学史」(『井上円了センターニュース』第4号、1995)、「キール大学法学部とシュタイン(上)(中)(下)」(『東洋大学紀要教養課程篇』第36、38、39号、1997、1999、2000)、「三木清のドイツ留学生活」(『井上円了センターニュース』第6号、1997)、「東洋大学における哲学史」(同年報第9号、近刊)などがあります。

よろしくご指導下さい。

吉野 剛弘 会員(慶應義塾大学大学院)

修士課程在籍時から本学会の事務局長である坂本先生のご紹介を受けて本学会と白線クラブが主催している旧制高等学校の研究懇話会に出席させていたいでいたのですが、この度博士課程への入学を契機に入会いたしました。旧制高等学校の入学試験制度とその入学試験の準備教育機関である予備校について歴史的な見地から研究しております。

日本の入学試験の過酷さはさまざまな形で注目をされております。受験というものを考えていく上で、その淵源にまで立ち返って検討してみる必要性があると感じ、卒業論文では戦前期の予備校の歴史について概略的に研究をし、修士論文では視座を予備校から入学試験に移し、予備校がその合格者を出すことに腐心した旧制高等学校入試、とりわけ1902(明治35)年から1907(明治40)年に行われた総合選抜制を中心に明治後期の入学試験について研究を進めました。今後は戦前期全体の旧制高等学校の入学試験制度と予備校について研究を進めていくことを考えております。

予備校の起源については諸説ありますが、現在あるような受験準備教育を行う予備校は100年くらい前までさかのぼることができます。しかし、このころの予備校は受験準備教育を行いはするものの、私立大学などが併設するケースも多く、今のように受験

準備教育専門の教育機関による予備校が主となるのは大正後期になってからです。また、東京や京都、大阪といった昔からの大都市に限らず全国の主要都市に予備校ができるようになるのも大正後期のことです。しかし、この頃すでに現在見られるような受験準備教育体制が整い、受験教育に対して積極的なアプローチがあったことは注目に値するわけで、日本における受験の意味を考える上で大いに参考になると考えております。

一方、旧制高等学校の卒業生は、白線浪人などがないわけではありませんが帝国大学へ事実上無条件に入学できしたこと、そして旧制高等学校が戦後の改革で大学の中に吸収されたことを考え合わせれば、その入学試験は今の大学入試に匹敵するといえます。竹内洋氏は明治後期の総合選抜制の導入をして「猫の目入試改革のはじまり」と称しましたが、戦前の旧制高等学校入試の改革は戦後の大学入試改革をしのぐベースで行われ、ひとつの制度が10年もつことがまれといった状況であり、当然のことながらすべてが失敗に終わりました。このような失敗の歴史から入学試験について何か学ぶべきところがあるのではないかと考え、現在では大正期以降についての旧制高等学校入試について調査を進めているところです。

#### 2000年度第1回例会報告----瀧井一博『ドイツ国家学と明治国制 一 シュタイン国家学の軌跡』（ミネルヴァ書房、1999年）合評会

今年度最初の例会が5月27日（土）午後3時30分から6時50分まで、明治大学リバティーホール6階会議室において開催された。瀧井一博（著）『ドイツ国家学と明治国制 一 シュタイン国家学の軌跡』（ミネルヴァ書房、1999年10月刊、350頁）の合評会である。この例会には次の4氏をコメンティターとしてお招きした（発言順）。柴田隆行東洋大学社会学部教授、堅田剛獨協大学法学部教授、大石眞京都大学大学院法学研究科教授、長尾龍一日本大学法学部教授。著者は会員、コメンティターすべて非会員というユニークな構成であった。司会（座長）は寺崎昌男会員。

最初、事務局を代表して坂本辰朗会員から挨拶があり、また座長の寺崎会員（『日本における大学自治制度の成立』評論社1979年）から本書刊行についての所感が述べられた。ついで本書に関する批評・批判・感想がコメンティターから、それぞれ約20分から30分間述べられた。休憩の後、午後5時30分から開始された第2部において、コメンティターの発言に対する著者の回答があり、他の出席者から質問がだされ、感想が述べられた。議論はつきなかったが会場の関係で6時50分に第2部を終了。論議は懇親会にもちこされ明治大学近くのレストラン「アミ」において午後10時まで継続された。なお、コメンティターの柴田隆行氏はシュタインが学生とし

#### 『大学史研究』投稿・執筆要領

1. 「大学史研究」への会員の投稿を歓迎します。
2. 和文原稿は20～30枚（400字詰換算）の分量を標準とし、英文題名と英文著者名を記した別紙を添付するものとします。和文でない原稿も同様の分量（刷上り6～9頁）を標準とし、和文題名と和文著者名を記した別紙を添付するものとします。また、読者の便宜のため、充実した和文要旨を添付することをお勧めします。
3. パソコン、ワープロを利用できる方は下記要領で原稿を作成して、フロッピーと印刷出力をお送りください。事務局で一括して印刷しなおして版下を作成します。フロッピーは返却します。手書きの方は、入力作業に多少の時間を要しますので早めにご提出ねがいます。
  - (1) ワード（マイクロソフト）あるいは一太郎（ジャスト・システム）の通常文書で保存したフロッピーを希望します。あるいはMS-DOS文書形式でも結構です。それが難しい場合は、適宜な形式で保存したフロッピーをお送りくだされば事務局で変換をこころみます。
  - (2) 用紙はA4を縦に使用して横書き、字詰めは自由ですが、おおむね40字35行とします（刷り上がりがそうなるとは限りません）。
  - (3) 第1頁の最初の5行ほどに表題と著者名（カッコ内に所属機関と部局名）を書き、1頁目にかぎり本文は6行目から書きます。
  - (4) 図表は別紙とし、本文の挿入個所に図表をレイアウトする空白をあけます。図表はそのまま製版します。
  - (5) 章、節の番号は大きい方から順に、I. II. III. ……、1. 2. 3. ……、(1) (2) (3) ……とします。
  - (6) 使用する文字種は、全角の漢字かな英数字、半角の英数字、注番号を使う上付き数字などとします。英数字は、1文字（1桁）の場合は全角文字、2文字（2桁）以上連続する場合は半角文字を原則とします。外字の使用は控えてください。  
なお、MS-DOS文書形式のファイルの場合は、イタリック、アンダーライン、あみかけなどは、印刷出力に指定を書き入れてください。
  - (7) 注と文献表は論文の末尾につけます。注番号は上付き数字の1, 2, 3, ……とします。  
邦語文献は、書名、雑誌名を『』、論文名を「」でくくります。  
外国語文献の書名、雑誌名は、イタリックを指定してください。

## 『大学史研究』第15号目次（2000年6月刊）

### <<論文>>

- 京大沢柳事件とその背景——大正初期の学制改革と大学教授の資質 谷脇由季子  
女性の高等教育——その矛盾と課題 ジェイン・ローランド・マーティン（ハーバード大学、坂本辰朗訳）  
工部大学校都検ヘンリー・ダイア——日英交流の推進者 O. チェックラント（加藤詔士訳）

### <<研究ノート>>

- 大学における官僚制度形骸化の歴史 中山 茂（神奈川大学経営学部）

### <<書評>>

- 渡辺かよ子著『近現代日本の教養論——1930年代を中心に』  
----田村栄子（佐賀大学文化教育学部）

## 『大学史研究』第16号の原稿募集のお知らせ

『大学史研究』第16号の原稿を募集いたします。投稿規定をご参照のうえ、ふるってご応募くださいますようご案内申し上げます。投稿をご希望の方は、下記投稿・執筆要領をご参考のうえ、2000年7月末日までに表題をお知らせください。原稿締切は2000年9月20日（厳守）とします。なお、発行予定を厳守するために、締め切り以降編集部に届いた原稿は事情を問わず次号送りとさせていただきます。

### 『大学史研究』投稿・執筆要領および原稿の送付先は以下の通りです。

(毎回『大学史研究』に掲載している要領を転載しましたが、原稿提出先のみは、今回だけの変更です)

て学び、大学教師として講壇に立ったキール大学の法学部に関する参考資料（学部の概要・構成員と関連文献）を配布された。また、コメンティターの堅田剛氏は本書が出版された昨年10月、本書に対応する研究書『独逸学協会と明治法制』（木鐸社）を上梓されている。

コメンティターの発言内容とそれに対する著者の回答の詳細については瀧井会員が（5月30日から6月13日までのドイツ・オーストリア研究旅行から帰国後に）『大学史研究通信』第21号に執筆の予定。

例会にはコメンティター4氏のほか、次の3名の非会員の方々が出席された。川田敬一氏（京都産業大学）、須賀博志氏（桐蔭横浜大学）、D. v. クヴァイス氏（明治大学文学部客員研究員 Dr. Dietrich von Queis, Universität der Bundeswehr Hamburg, Leiter der wissenschaftlichen Weiterbildung）。会員の出席者は次の通り。古屋野素材、坂本辰朗、瀧井一博、寺崎昌男、中野実、別府昭郎、早島瑛。なお、今回の会場の設定は古屋野会員のご配慮によるものである。記して感謝の意を表したい。（文責・早島瑛）

### <大学史編纂ニュース1>

## 大阪市立大学における大学史の編纂

広川 穎秀（大阪市立大学）

### 大阪市立大学百年史の編集

大阪市立大学(以下、「本学」とする)は、1949(昭和24)年に創立された公立の総合大学である。本学の前身は、大阪商科大学、大阪市立都島工業専門学校、大阪市立女子専門学校、大阪市立医科大学であるが、そのうち大阪商大がもっとも歴史が古く、その源流をたどれば1880(明治13)年の大阪商業講習所創立までさかのぼる。現在、本学は、商学部・経済学部・法学部・文学部・理学部・工学部・医学部・生活科学部の8学部と経済研究所、看護短期大学部、学術情報総合センターなどから構成されている。

本学では、1980年に創立百周年記念事業がおこなわれたが、その一環として『大阪市立大学百年史』全学編・部局編各2巻、計4巻が刊行された。百年史編集事業は1977年から11年間に及び、1987年によく全巻の刊行を完了した。

## 大学史資料室の設置

百年史編集に際しては、基本史料の不足に悩まされた。その教訓を生かし、百年史編集過程で収集した史料の散逸を防ぎ、将来の大学史編集に備えて恒常に史料の収集・整理をおこなう目的で、1988年、大阪市立大学史料室が設置された。史料室は、1991(平成3)年、改組されて大阪市立大学大学史資料室となり、現在に至っている。この間、1996年の学術情報総合センター開設にともない、その6階に移転したが、専任職員の配置がなされないなど、資料室本来の機能を発揮するうえではなお困難を抱えている。

## 「125年史」の計画

本年3月、評議会において「大阪市立大学125年史」(仮称)を編集するという大学の意思決定がなされた。125周年は2005(平成17)年であるが、その2年後の2007年に「125年史」全1巻を刊行する計画である。「125年史」は、「百年史」以後の「大学改革」などが記述の中心となる見込みであるが、必要に応じてそれ以前にもさかのぼるという考え方で編集される。今秋、125年史編集準備委員会(仮称)が設置される予定である。

## <大学史編纂ニュース2>

### 『一橋大学125年史』(英文)の編纂

一橋大学経済研究所 西沢 保

一橋大学は1995年に創立120周年を迎える、『一橋大学百二十年史—Captain of Industryをこえて』(282頁、非売品)を刊行した。それは一橋大学学園史刊行委員会(委員長中村政則)により編集され、一橋大学から1995年9月に発行された。これにさきだち、1982年から1994年にかけて史料集『一橋大学学制史資料』(全10巻、補遺1巻、補遺別冊3巻)、および『一橋大学学問史(1986年)』が刊行された。また、細谷新治(稿)『商業教育の曙』(上下2巻、1990-91年)や小島慶三(稿)『日本の近代化と一橋』(1987年)を含む稿本が如水会学園史刊行委員会から刊行され、さらに、1982年から1986年にかけ一橋大学学園史編纂[事業]委員会から、『一橋籠城事件』(1982年)、『申酉事件史』(1983年)、『一橋会資料集』(1986年)などを含む合計14冊の資料が刊行された。

これら多数の史料集、稿本、『学問史』、『百二十年史』の刊行をふまえ、英文の「125年史」を刊行する企画が生まれたのは阿部謹也学長時代の1995年のことであった。その後、1998年夏にロンドンのマクミラン社からの出版が決まり、以降、英文125年史ワーキング・グループ(座長池間誠)のもとに執筆、英訳、編集の作業を進めてきた。

陣の手になるものであり、それぞれが単独でも十分に読者を惹きつける魅力を持っている。しかしそれ以上に、編者ヤーラオシュが提起した見事な比較の枠組みにより、本書は他に類を見ない高等教育の比較歴史的考察の書となっている。出版から17年を経た現在でも、そのスタンダードとしての地位は失われてはいない。

## 事務局ニュース 『大学史研究』第14号 第15号内容予告

諸般の事情により、『大学史研究』第14号と第15号がまだ会員の皆様のお手元に届いておりませんが、鋭意発行作業中です。発行に先立ちまして、第14号および第15号の内容一覧を掲載いたします。

### 『大学史研究』第14号内容一覧(1999年3月刊)

<<第21回大学史研究セミナーの記録>>

課題研究「技師・技術者・工科大学—エンジニアの誕生」

堀内達夫(大阪市立大学)「グラン・ゼコールとエンジニアの養成」

鳩澤歩(大阪大学)「ドイツ語圏における鉄道技術者集団の生成—雇用市場と技術教育制度の関連からみた先駆的「技師」集団—」

#### コメント

高橋秀行(流通科学大学)「鳩澤報告に寄せて」

高橋雄造(東京農工大学)「各国における技術教育の制度化—電気工学の立場から」

<<論考>>

ロシアの中のドイツの大学 橋本伸也(京都府立大学)

第三世界における学生の政治的活動—その理論的研究の試み 北村友人(UCLA大学院)

<<書評>>

別府昭郎『ドイツにおける大学教授の誕生—職階制の成立を中心に』

---望田幸男(同志社大学)

別府昭郎『ドイツにおける大学教授の誕生—職階制の成立を中心に』

---岩田弘三(武蔵野女子大学)

児玉善仁著『〈病気〉の誕生—近代医療の起源』

---服部伸(岐阜大学)

Karl Heinz Burmeister, 100 Jahre HSG. Geschichte der Universität St.

Gallen. Hochschule für Wirtschafts-, Rechts- und Sozialwissenschaften, St.

Gallen 1998. 347S. ISBN 3-7272-9248-2. ---早島瑛(関西学院大学)

その間、英文校閲をマクミラン社のアジア関係書の編集者でもあるマルコム・ファルカス教授 (University of New England) にお願いし、1999 年の夏休みには同氏を一橋大学に招聘してワーキング・グループと合宿?を行った。本書は最終的な編集作業を行った池間誠、井上義夫、西沢保、山内進編で創立 125 周年にあたる 2000 年 10 月にマクミラン社から出版される予定である。出版にあたっては、これまでの史料集等と同じように、如水会の寛大な理解と財政的援助を受けている。

本書のタイトルと構成は次の通りである。

Hitotsubashi University 1875-2000 :

A Hundred and Twenty-Five Years of Higher Education in Japan

### Part.1 University of Commerce in the Making

Chapter 1 Modernization and Organization of Higher Commercial Education in Japan

Chapter 2 Birth of the Higher Commercial School

Chapter 3 Road to University

Chapter 4 The Origins of Liberalism

### Part.2 University of Commerce in Full Swing

Chapter 1 The Establishment and Structure of Tokyo University of Commerce

Chapter 2 The Development of Tokyo University of Commerce:  
Commercial College vs. Full University

Chapter 3 War-Time Education and Scholarship

Chapter 4 Social Sciences Coming of Age

Chapter 5 Academic Development at the University of Commerce

Chapter 6 The Study of Law : a Liberal Approach

### Part.3 Post-War Development as Hitotsubashi University

Chapter 1 The Defeat of Japan and the Rebirth of the University

Chapter 2 The Post-War Educational Reforms and the Foundation of Hitotsubashi University

Chapter 3 Hitotsubashi University and the Popularization of Universities

Chapter 4 University Dispute and the Rebirth and Reformation of Hitotsubashi University

Chapter 5 The Age of Reformation

<近刊紹介>

K. H. ヤーラオシュ編、望田幸男・橋本伸也・安原義仁監訳『高等教育の変貌 1860-1930年』(仮題) 昭和堂、2000年秋刊行予定 (K. H. Jarausch (ed.), *The Transformation of Higher Learning 1860-1930*, Stuttgart & Chicago, 1983.)

福石 賢一 (九州女子短期大学)

未公刊の書物の紹介というのは異例のことであろうが、PRの意味もこめて、大学史研究者にとって必読の書になると思われる本書の紹介をさせていただくことにした。

本書は、19世紀後半から20世紀前半までの英米独露の四カ国に生じた高等教育の変貌の過程を比較社会史の観点から考察したものである。

本書の最大の特徴は、高等教育を「18歳から始まる中等後教育」とゆるやかに定義したうえで、規模の拡大、目的と社会的機能の多様化、学生と教師の出自の変化、専門職化という四つの観点から各国の変化の共通性と個別性を明らかにすることを試みた点にある。また、「雲をつかむような」議論に対して「できるだけ数量的回答を示し、社会史を知識史に結びつけ」ようとした点も本書の特徴の一つといえる。

本書の構成は四部構成。全体の趣意説明にあたる編者による序章のあと「拡張」「多様化」「開放」「専門職化」の各部が続く。それぞれの部には英米独露に関する論文が一本ずつ配され、全体は計13本の論考から構成されている。

その一例として、筆者が訳出を担当した「イングランド社会の変貌のパターン」(第三部「開放」)の概略を紹介すると以下の通りである。著者パーキンは、この時期のイングランドに生じた高等教育の変貌を「大学の意味・目的・規模と人の革命」と捉え、この間に大学は「若きジェントルマンと聖職志望者のための補助的な完成教育機関から、近代工業化社会の原動力へ」と変貌を遂げたと主張している。

1850年の大学に学んでいたのは同一年齢集団のわずか0.3%にすぎず、そのほとんどは聖職者や大地主の息子達であった。また、当時の大学は知的文化や科学的研究の面でも社会に対して貢献するところはなかった。これに対し、1930年の大学には同一年齢集団の1.7%が学んでおり、このうちの25%は労働者階級の出身者であった。大学教師も半数が下層中産階級出身者から供給されるようになり、大学教師の職は自律的な世俗の専門職となった。この頃から大学の教師たちは産業界や専門職集団にその成員と専門的知識を供給する「キー・プロフェッショナル」としての道を歩み始めたことになった。

高等教育に「革命」が起こった理由についても、農産物価格の下落や「人民予算」のために地主階級が新しい収入源を求めて大企業の役員室に殺到したこと、科学産業の勃興と大きな政府の登場により大卒需要が拡大したこと、さらにこれらの要因が結合して社会の最高の地位をめぐる学歴競争が開始され、大学が社会的選抜における淘汰機能(「闘争効果」)を持つに至ったことがその理由であるとの分析をおこなっている。

筆者が担当した章のみならず、本書を構成する各論考は当時考えられ得る最高の執筆